

風の耳朶

Kaze no mimitabu

灰谷健次郎

理論社

風の耳朶

Kaze no mimitabu

灰谷健次郎



風の耳朶

NDC913
四六判 20cm 396p
2001年12月
ISBN4-652-07705-X

作者 灰谷健次郎

画家 坪谷令子

株式会社 理論社

発行者 下向 実

〒162-0056

東京都新宿区若松町15-6

電話 営業 (03)3203-5791

出版 (03)3203-2577

2001年12月第1刷発行

©2001 Kenjiro Haitani & Reiko Tsuboya Printed in Japan.

落丁・乱丁本はお取り替えます。

URL <http://www.rironsha.co.jp>

風の耳朶

插图
装订

坪谷令子
郷坪浩子

バス停に降り立つと、さっと吹きつけられたように海の匂いがした。

「すぐそこが海なんだ」

「バス停は旧国道にあるんですね。あなた」

「いいもんだ。旧道は」

「いいもんですねえ。干してある洗濯物がのぞいていたり、小さな八百屋さんやお米屋さんが仲良く軒を連ねていて、店先には、春蒔きの野菜の種が並べられていたり……」

「おやおや。ハルちゃんはバスの中から、そんなものを見ていたのかい。まだまだ目はしっかりしているんだ」

「目だけが、しっかりしていてもしょうがないんですけど」

つまらないことをいつてしまったかな……と、籐三は呟くようにいった。

「いえいえ、あなた」

とハルはなんの屈託もないようすだ。

籐三は腕時計を見た。

「少々、早く着いてしまったようだ」

「迎えにきてくださる時刻は確か十二時でしたね」

「まだ、十一時を少し回ったばかりだ」

「いいじゃありませんか。そこら辺り歩いてみましょうよ」

「うん。それもいい」

川沿いを、ほんの少し歩くと、じき海に出た。

海沿いは広いバイパスで、車の行き来が激しかった。

「どこか渡るところはないかな」

「だいぶ向こうの方に信号がありますよ」

「そこまでいくしか仕方ないか。やれやれ不便なもんだ」

「わたしたちには不便でも、ここを車で通る若者たちには便利なものなんですよ」
なるほど、と藤三はいった。

「ハルちゃんは物事を、そういうふうにもとらえて、ものを考えられるからいいんだ」

「そうですかねえ」

「うん。いいことだ」

と藤三は大きくうなずいていった。

二人は歩いて迂回し、信号の道を渡って、海沿いの歩道に出た。

「あの松のところが海水浴場らしいな。そこまで歩いてみようか」

「そうしましょうかね」

「うん」

カモメが群れていた。二人は、それを見ながら歩いた。

「あなた」

「なんだね」

「今さら、こんなことをいい出して、おかしく思われるかもしれませんがね……」

「なんじゃ。なんでもいつてみなさい」

「あなたがわたしのことを、ハルちゃんと呼んでいることですがね」

「ん？」

「あなたはずっと昔から、わたしのことをハルちゃん、ハルちゃんと呼んでくれて、わたしは、はいはいと返事をして……」

「それがどうした？」

「わたしたちは慣れてしまつて、どうとも思いませんけれど……」

「……………」

「他人様は変に思つてやしませんかね」

「変かね」

「ふつう、ハルちゃんつていうのは子ども向きのいい方でしょう？」

「子ども向きかね」

「そりやそうですよ」

うーんと籐三は小さく唸った。それから、ゆるゆる首を振っていった。

「なにかの受賞パーティーで、基村謹蔵もとむらきんぞうは、籐三さんが奥さんを呼ぶとき、ハルちゃんハルちゃんっていうのが、とてもいい。あれをきくと、ぬくい気分になるといったじゃろが」

基村謹蔵は、日本画壇の大家である。

「そんなことをおっしゃいましたか」

「おまえ、もう忘れとるのか」

「忘れましたか」

「忘れとる、忘れとる」

「そうですか。忘れてますか」

「忘れとる」

籐三は断固としていった。

「それじゃ、やっぱりハルちゃんていきますか」

とハルは、のんびりした調子でいった。

「今さら変えられん」

「そうですねえ」

二人は、ゆっくりした速度で歩いた。

少し沖に、クレーンのついた船が浮かんでいる。

「なにをしとるのか。あれは」

「なにをしているのでしょうか」

二人は立ち止まって目を凝らした。

クレーンの爪が船腹の石をつかんで、それを海へ投げ捨てているのであった。

「埋め立てているんでしょうか」

「なんのために、ああいうことをしとるのか」

「そうですね。なんのためでしょうかね」

大きな立て看板があった。二人は、それを見る。

「くだらん」

藤三は吐き捨てた。

海の一部を埋め立て、あらたに海浜公園を作るという公示だった。

「くだらん」

藤三は、ふたたびいった。

「自然を壊すのはいけませんよね」

ハルは柔らかに、それをいったが、藤三は

「いかん」

と強い調子でいった。

「間違っとする」

「わたしも、そう思います」

「思うか」

「思いますよ、そりゃ」

「さつき車の通る道路は若者にとって便利だといったハルちゃんの言葉をほめたが、それはハルちゃんの一面的でないものの考え方をほめたので、車の道路がいいといったわけじゃないぞ」

「はい、はい」

「思うてみイ。ここに、車の走る道がのうて、のんびりした旧道だけ通っているとするじゃろ。そうすると……」

「そうすると……のどかで、平和で、ほんとうにいいところですよねえ」

ハルは、しみじみといった。

「うん」

藤三は大きく首を前に折る。

「さつき、せかせかと、わたしたちの横を通っていった犬などは、のんびり、とことこと歩いていくかもしれん」

「犬や猫は安心してこの辺りで昼寝をしますでしやうし……」

「うん。それを眺めて、にんげんは心を安らかにする」

「そういう風景が少なくなりましたね」

「うん。少なくなった」

二人は歩いた。

埋め立て地があり、さらにそれを広げるつもりなのか、その場所でテトラポットを作っているのだった。

二人の歩く速度がどうしてもはやくなる。

ハルの吐く息が少し乱れた。

「いかん。おまえが疲れる」

籐三はそういつて足を止めた。

「疲れたか」

「少し疲れましたがねえ」

ハルはそれを、そつといった。

「少し休もう」

「いいですよ。ゆっくり歩いてくだされば……」

「すまん、すまん」

「気を遣^{つか}わないでくださいよう」

とハルはいった。

「そうか」

二人は、ゆっくり歩いた。

道のそばに、かろうじて居場所をとっているといったふうな松があり、その横を車椅子^{くまいす}を押して、若い娘がやってきた。

車椅子には、ちょっと、しかめっ面をした老人が乗っている。

「ご苦労さまです」

ハルは、そういつて、その若い娘に軽く会釈した。

あら、と娘は少し顔を赤らめ

「はい」

と、あわてたようにいった。

すれ違い

「いい風景だ」

と、しばらくして籐三はいった。

「おじいさんと娘さんの組み合わせは、なかなかいいもんでございますねえ」

「いいもんだ。うん」

籐三は満足げにうなずいた。

「あれは孫娘ちゅうとこか」

「そうでございませんでしょう。あの娘さんは白い制服のようなものを着ていましたから、施設で働いている方かもしれませんよ」

「老人ホームのようなところか」

「そうでしょうね。ああして一人で動けないご老人を、散歩に連れ出しているんでしょう」

「おまえ。散歩ということはないだろう。言葉は正確に使わにゃいかん」

「いかなですか」

「いかん」

「車椅子の散歩はどうでしょう」

「うーん。よし。まけといてやろう」

と籐三はいった。

「えらいもんだ」

「なにがですか」

「若い娘が、そういうところで働くのは頼もしいと、おまえは思わんか」

「ああ、なるほど。そういうことですか。思います、思いますよ。心根のやさしい娘さんなんですよ。うね」

「その心根を、ずっと持ち続けてほしいもんだ。にんげんは得てして初心を忘れる」

そんなことをいう籐三は、車椅子の、しかめっ面顔の老人に少し似ている。

ジョギング中の若い男とすれ違った。

「ハルちゃん。今、何時じゃ。どれくらい歩いたかのう」

「かれこれ二十分も歩いたでしょうか」

「いかん。おまえの体は、それくらいが限度じゃ。少し休もう」

「少し休みますか」

「休もう。あの店でコーヒーでも飲もう」

「あの店は喫茶店ですか」

その店は、とびらが総ガラスのしやれた店で、モナコ苑という店の看板のまわりを、赤と青の灯がくるくる回っているのであった。

「なんの店でも、コーヒーくらいはあるじやろう」

「そうですね」

その店は、開店早々らしく二組の客がいるだけだった。

「食事をとる店らしいぞ。ここは」

店内のようすを見て、籐三はいった。

「おやおや。そうですか。でも、わたしが店の人に頼んできましようね。コーヒーだけ飲ませてくだいって」

ハルが立つ前に茶髪の娘がやってきた。

「ランチタイムですから、時間は五十分間です。五十分以内に食べてください。料金は九百八十円です」

娘は、ごく事務的にそれをいった。

「うん？ なんのことじゃ」

籐三は呟くようにいった。

ハルも、周りを見回した。

「なにを五十分以内に食べるのじゃ」

藤三は茶髪の娘にたずねた。

「なにを……って、ここは焼肉の店ですよ」

娘は口を尖らせて答えた。

「ああ、焼肉のお店ですか。ああそうですか」

ハルは気を入れて店の中を見た。

「あなた。そういえば、あそこにお肉が並べてありますよ」

「うん？」

肉だけではなく、切った野菜もケースに並べられてあった。

「そこには西洋ケーキも置いてあるぞ」

藤三は別のところを指さしていった。

藤三のいうところだけをとっていえば、喫茶店だといえなくもない。

「そうですね……？」

ハルもげんな表情になる。

「なんだかいろいろありますよ」

ハルは驚いている。

「食べるんですか。食べないんですか」

茶髪の娘はつつけんどんにきいた。

「なんだ。そのもののいい方は。無礼者め」

と藤三は娘を叱りつけた。

「わたしら、忙しいんですよ。早くしてください」

怯まず、押してくるような感じで若い娘はいう。

「まあまあ、おじょうさん。わたしらは年寄りですから、少し時間をくださいな」

ハルは柔らかに娘にいった。

「考えて注文しますから」

「……………？ 注文するつてなによ」

娘は乱暴にいった。

「考えて、そして食べるものや飲みものを注文しますから」

ばつかみたい……と娘は呟くようにいった。

ハルにはきこえたが、藤三の耳には、その娘の声はとどかなかった。

とどいていれば、藤三のかみなりが落ちたはずだ。

「ここは食べ放題の店だから、時間内だったら、なにを、どれだけ食べてもいいんです」

切り口上に娘はいう。

「食べるんですね」

押しつけがましく娘はいつて、テーブルの真ん中に位置する部分のふたをとった。

肉を焼く網状の鉄ばんが見えた。娘はスイッチをひねって、ガスの火をつけた。

「出よう。ハル」